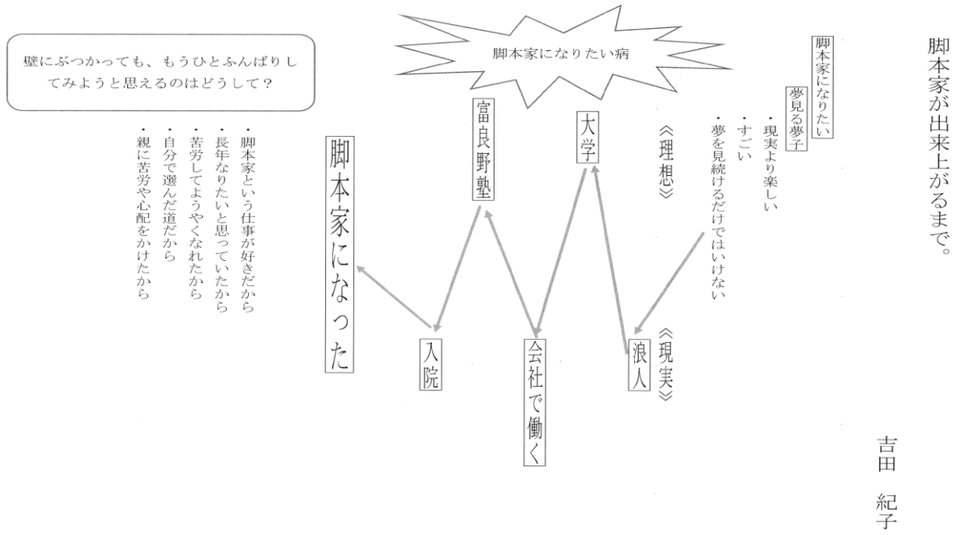
言語活動の充実に関する指導事例（別紙様式）

高知市立愛宕学校第３学年　道徳「脚本家が出来上がるまで。」

平成２９年５月１６日（火）　　指導者　　渡部　健太郎

児　童・生　徒　の　主　な　活　動

【中心発問】　壁にぶつかっても、もうひとふんばりしようと思えるのはどうしてか。



◆話の情景を思い浮かべる。
◆活動をする。

（1）　脚本家という仕事を知る。
（2）　資料を範読する。
（3）　根拠もないのに、脚本家になりたいと思い続ける筆者をどう思うか考える。
（4）　「脚本家になりたい病」」が悪化したのはなぜかを考える。
（5）　壁にぶつかっても、もうひとふんばりしようと思えるのはどうしてかを考え、ワークシートに書く。
（6）　中心発問について、グループで意見交流する。（対話的な学び）
　　仲間の意見は赤字でワークシートに記入する。
（7）　本時の授業を通して、自らの将来に向けて感じたことや考えたことを具体的に書く。

言語活動充実のポイント

自分の将来について考える機会の多い今の時期に、思っていることや考えていることはたくさんある。しかし、それを表に出せる生徒ばかりではないため、中心発問はワークシートへメモをする小ステップを入れる。さらに、それを交流することで、自分の考えだけでなく仲間の思いを知ることができる。また、仲間と話している中で、自分の考えが変化したり、固まったりする。仲間の意見を赤字でワークシートに記入することで、視覚化できてより明確になる。終わりに、本時の授業から目の前の自分の内面へと深め、自らの将来を自ら選択し、理想に向かって努力し続けていけるよう前向きな考えになるよう促す。
・個人で考えをまとめて書く。
・小グループで交流し、自分とは異なる意見は赤字で記入する。

言語活動充実のための教師の主な働きかけ

◆本時では、筆者の理想を追い求める姿に共感しつつも、現実は厳しいものであることを知る。しかし、自らが追い求めてきた理想を持つことで、理想実現に向けて努力し続けることができることを学ぶ。

・資料をもとに、厳しい現実を目の当たりにしながらも、理想を追い続ける筆者の思いをくみ取る。

筆者の脚本家になるまでの道のりを時系列で追い、黒板に見える形で書くことで話を振り返る。特に、黒板を上下に分けて、理想と現実に起きたことを分けて書くことで、筆者の理想と現実が一目で分かるようになる。

・中心発問では、個人の考えをワークシートに記入する。小グループで意見交流をし、全体で発表する。

記入の段階から教師は、机間指導しながら生徒の意見を拾いグループ分けをしておき、全体の発表での意見の分類をしやすいように発表の順番も工夫する。
生徒は、自分とは異なる意見を赤字で書くことで、自分の考えと比較しやすいようにする。

・本時の授業を通して、感じたことや考えたことを自分の将来を絡めて書く。

現実は厳しいながらも、理想を追い求め努力できる人でありたいというような前向きな意見になるように、筆者の脚本家になるまでの理想と現実をしっかりと押さえていきたい。
学級通信で多様な意見を紹介し、今後の学級運営に活かす。

実践を振り返って

「自分が選んだからこそがんばれる」といった意見が多く出ていた。

- **自分で決めた道でも、絶対１つくらいは後悔とかいろんな感情がでてくると思う。でも、他人に決められた道より自分で決めた道の方が楽しさもあるし、悔いも少ないと思う。**
- **自分で決めた事は、他人に決められた事よりもがんばれると思うし、それを諦めずに続けていくことで、目標などの達成に少しでも近づけることが分かった。**
- **自分で決めたことは最後までやりとげる事に意味があると思いました。逃げたくなったりもするけれど、逃げたら絶対後悔するので最後までやりとげる。**
- **自分の心でしっかりと決めていることは何があってもやり通せると思う。**

しかし、範読の時間に１５分かかっており、対話的な学びに関わる時間が多く確保できなかったため、一部の生徒の発言を全体に返す程度に留まってしまった。全体に返した後、個人で思考する場面をもう少し取りたかったので、長い読み物資料は事前に読ませておくなどの手立てが必要だと感じた。

また、道徳全体を通して「分かっているけれど、なかなかできないよね」という共感から「それでもこの主人公ができたのは何故だろう」という揺さぶりをかけて、より深く「人間が目指す像」について考える時間を取ることは非常に重要であることを感じた。

指導の効果

◆発問を端的かつ明瞭にしたことで、生徒の思考が停止することなく授業を展開させることができた。